

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00984

研究課題名（和文）ファーティマ朝カリフ概念の研究によるカリフ史の再構築

研究課題名（英文）Study on the Fatimid Caliphate based on documentary sources

研究代表者

亀谷 学（Kameya, Manabu）

弘前大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：00586159

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：イスラーム世界における指導者と位置付けられるカリフについて、これまでイスラーム史全体の流れの中で位置付けられてこなかったファーティマ朝に着目して、そのカリフ概念の現れについて検討した。碑文史料や貨幣史料などの同時代史料を中心に分析を行った結果、貨幣史料の分析からは、それが五つのフェーズに分けることができ、ファーティマ朝がアッバース朝の打倒とイスラーム共同体全体の指導者となる機運と密接な関係があると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イスラームにおける統治の伝統は、現代のイスラーム世界における統治のあり方を少なからず規定するものであり、カリフによる支配はその最も重要な要素である。本研究で扱ったファーティマ朝のカリフ概念は、それがシーア派であったこともあり、カリフ史の中で十分に消化されてこなかったが、それがイスラーム共同体全体と一地域の双方への指向が拮抗したものであって、スンナ派政権も含め、ファーティマ朝期以降のカリフを名乗った政権のあり方に影響を与えていたことを指摘した点で、イスラーム社会のより良い理解に資するものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the expressions of Caliphal authority, focusing on the Fatimid dynasty. Close analysis of contemporaneous historical sources, such as inscriptions and coins, revealed that the expression of Caliphate authority of Fatimid dynasty can be divided into five phases, which are closely related to the momentum to overthrow the Abbasids Caliphate and to become the leader of the entire Islamic community.

研究分野：中世中東史

キーワード：カリフ ファーティマ朝 貨幣史料

1. 研究開始当初の背景

イスラーム世界における統治に関する研究、特にその基軸となるカリフ制度に関する研究は、イスラーム世界においても、近代以降の欧米においても、盛んに行われてきた。「カリフ」とはムハンマド死後に、彼に代わってイスラーム共同体の指導者となった人物を指す。中世イスラーム世界では、様々な勢力がカリフ位を巡って争い、その地位が持つ意義についても幾度もの変容を経てきたが、カリフに関する近代以降の歴史研究では、その変容をどう捉えるかによって、それぞれの時代の理解を修正することにもつながってきた。例えば、クローンとハインズによる『神のカリフ』(P. Crone & M. Hinds, *God's Caliph*, Oxford University Press, 1980)は、カリフとは本来「預言者ムハンマドの後継者」ではなく「神の代理人」であったという考えを提示し、初期イスラーム時代の理解に大きな修正を迫った。この研究には批判も多くなされているものの、カリフ制研究にとっての新しい古典となりつつある。ただしそれはウマイヤ朝期・アッバース朝期のカリフに関する議論を一般化したものであり、特に、アッバース朝のカリフがその実権を失って以降のカリフ概念については、未だ十分な検討が加えられていない状況である。

2. 研究の目的

本研究の核心をなす中心的な問いは、「ファーティマ朝という、アッバース朝とは異なる環境で出現した王朝においてカリフ概念がどのように展開、変容し、それがアッバース朝カリフ権やさらに後のカリフ概念理解にどのような影響を与えたのか」というものである。ファーティマ朝は、西暦10世紀初頭にチュニジアに勃興し、969年にエジプトを征服、その後シリアなど東地中海に勢力を伸ばした王朝である。彼らは、アッバース朝のカリフに対抗してカリフを名乗ったことが知られ、カリフ制の展開、またイスラーム世界における統治理念に対して極めて大きな影響を与えた。しかし、ファーティマ朝のカリフについては、ファーティマ朝がシーア派の王朝であって、現代においてムスリム人口の80%以上を占めるスンナ派王朝を中心に扱うカリフ研究の中では詳細に取り上げられることは少なかったこと、ファーティマ朝時代に著された同時代の歴史叙述の多くが散逸し、現存していないために通常の歴史文献を中心とした手法で扱うことが難しかったことなどから十分な研究が行われてきていない。

しかし、近年のスンナ派形成史研究においても指摘されるように、アッバース朝中期におけるスンナ派の形成には、当時政治的影響力を増していたシーア派の影響が見られ、同様に、スンナ派のカリフ概念を考える際にも、この時期のシーア派勢力の影響を踏まえて考える必要がある。それはファーティマ朝が、カリフを頂点とする王朝として出現したことによって、初期イスラーム時代に展開されてきた基本的なカリフ概念の前提であった、「単一のイスラーム共同体」という建前が、既に成り立たないものであることが突きつけられたからである。そうしたファーティマ朝の出現によって、アッバース朝カリフの側も「スンナ派のカリフ」としての体裁を整えはじめ、現代まで続くスンナ派の統治論が形成されてゆくことになる。つまり、ファーティマ朝カリフの出現によって、イスラーム統治の議論が新たな段階へと到達したのである。それはファーティマ朝以降、アッバース朝以外の政権の長がカリフを名乗ることが次第に一般的なものとなることにも繋がってゆく。

このように、ファーティマ朝におけるカリフ概念はイスラーム史上において極めて重要な影

響を与えたものであると考えられ、これについて深く分析することでイスラーム世界の統治理念の様相をよりよく理解することに大きく資することが可能となる。

3．研究の方法

本研究では、ファーティマ朝の各時代について、そのカリフ制度を支えるためのカリフ概念、特に称号を中心に、その変遷について明らかにすることが目的となる。そのため、これまで翻刻・出版されてきた碑文史料、貨幣史料のテキストを中心として網羅的な調査を行い、ファーティマ朝カリフの意図が反映された同時代史料から、その変遷を明らかにした。

碑文史料に関しては、その多くが、E. Combe et al., *Répertoire chronologique d'épigraphie arabe*, Le Caire : Imprimerie de l' institut français d' archéologie orientale, 1931- に採録されており、これを基礎データとして利用した。また、貨幣史料については、N. D. Nicol, *A Corpus of Fāṭimid Coins*, Giulio Bernardi: Trieste, 2006 を基礎データとして網羅的なデータベースを作成した。

これらの資料を基盤としながら、文書史料や文献として残された叙述史料などを補助的に用いてファーティマ朝におけるカリフ概念の変遷について検討した。

4．研究成果

研究成果は、COVID-19 の影響により追加調査を行えていないことから、暫定的なものであるが、現時点では、貨幣史料の分析から以下のようなファーティマ朝におけるカリフ概念の変遷が明らかになっている。

ファーティマ朝期の貨幣史料は、そのスタイルが五つの時代に分けられる。 チュニジアにおけるファーティマ朝成立からエジプト征服前までの時代、 エジプト征服を成し遂げた第四代ムイッズと第五代アズィーズの時代、 第六代ハーキムと第七代ザーヒルの時代、 第八代ムスタンシルと第九代ムスタアリーの時代、 第十代アーミル以降の時代、である。この中でも、四重の円の間のアラビア語銘文を記すという、ファーティマ朝独自の貨幣デザインをとったのは、 と の時代であり、ウマイヤ朝以来の伝統的な貨幣デザインと行きつ戻りつをしていることになる。そして、独自のデザインを採用した と の時代は、ファーティマ朝にとって、アッバース朝を打倒するという機運がもたらされていた時代であったことが、その採用の大きな要因であったと考えられる。

ファーティマ朝の発行した貨幣は、それが高い純度を保ったこととも相まって、地中海世界において広く流通する貨幣となった。そのデザインに大きく二つのパターンがあったことは、後に一地方を支配してカリフを名乗った政権にとって、ウマイヤ朝・アッバース朝モデルだけではない、貨幣による権威の主張を可能にしたと言えるだろう。すなわち、新たな、これまでとは異なるイスラーム政権であることの主張と、伝統的な権威を引き継いだイスラーム地方政権であることの主張が、併存してゆく指標となったと考えることができるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Manabu KAMEYA
2. 発表標題 Fatimid coinage and Caliphal authority
3. 学会等名 International Medieval Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Manabu Kameya
2. 発表標題 Use of Silver Coins in the First Centuries of Islamic Egypt: An Analysis based on Arabic Papyrus Documents
3. 学会等名 World Congress for Middle Eastern Studies 2018, Seville (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 亀谷 学
2. 発表標題 ファーティマ朝カリフ政権における貨幣発行：アッバース朝初期との比較への視角から
3. 学会等名 イスラーム初期史研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------